

審査の結果の要旨

氏名 加藤 省吾

本論文は、「ケア決定プロセスモデルの開発とその応用」と題し、全6章から成り、高齢者に対する介護サービス提供の計画立案方法について論じている。

第1章は序論であり、本研究の背景と目的について述べている。2000年4月から公的介護保険制度が開始されたが、介護対象者のケアニーズとケアの関係、さらにケア提供のための介護サービスの関係を明らかにした手法が存在せず、そのため現状のケアプランが不十分であって、介護の質を保証し対象者の状態に適合した妥当なケアを導出するための方法論の確立が急務であるとしている。本研究では、ケアプラン作成プロセスの全体像を提案し、その中でケア決定プロセスを効果的・効率的に実行するための方法論を開発することを主たる目的としている。さらに、開発した方法論をケア設計、サービス提供プロセス設計、意思決定プロセス設計へと一般化することも目的とし、病院における転倒・転落事故防止、退院調整プロセスの確立という2つの課題に適用している。

第2章では、ケア決定プロセスモデルの設計について述べている。介護の現場における一般的問題として、介護対象者の状態評価と社会的要素の考慮が分離できていないこと、および具体的なケアの内容が十分に記述されていないという2つを指摘し、これらの問題に対応するため「ケア決定プロセスモデル」を提案し、このモデルによって明らかにされる必要なケアに、家族、金銭など社会的要素を加味して介護サービス計画を立案する枠組みを提案している。本論文が提案する「ケア決定プロセスモデル」は、対象者の状態から必要なケアを導出する合理的な思考プロセスを表現した「ケア決定手順」と、プロセスで必要となる知識構造を整理した「知識データベースの構造」から構成されている。提案するケア決定手順では、まず対象者にアセスメントを実施し、その身体的・精神的特徴を、各能力要素に関する現実能力として評価している。次に6つのADL（日常生活動作能力）に対して、各動作に必要な能力と対象者の現実能力を比較し、そのギャップをケアニーズとして同定している。さらに、ケアニーズを満たす具体的な手段として、環境要因による必要能力低下や現実能力向上、あるいは介護者による支援などのケア候補を導出している。

第3章は、第2章で提案した「ケア決定プロセスモデル」に必要な知識コンテンツの構築について述べている。起居・移動、更衣、食事、整容、排泄、入

浴の6つのADL項目を対象として、医療・福祉専門職との議論、実際のケースへの適用による修正、核となる構造への整理による修正を経て、モデルに必要な知識コンテンツを構築している。構築した知識コンテンツを構成するものは、要素動作、能力要素、候補ケアの一覧、要素動作－能力要素－候補ケアの対応関係、必要能力を設定するルールなどである。

第4章では、第2章、第3章で提案する方法の一般化について論じている。ケア決定プロセスモデルは、直接的にはこれまで存在しなかったケア設計の一般的方法論を与えるものであり、またニーズをシーズで合理的に満たすというサービス提供プロセス設計の方法論的基礎を与えるものであるとしている。さらに、意思決定問題を、合理的な思考手順と手順に必要な構造化知識（知識ベース）とにより構造化できるとして、その方法論も提案している。

第5章では、第4章の考察を踏まえて、ケア決定プロセスモデルの応用として、病院における転倒・転落事故防止モデル、退院調整プロセスモデルの構築について述べている。転倒・転落については、転倒・転落リスクを「患者が安全にADLを達成するために発生するニーズ」であるととらえ、ニーズを満たすための手段として人的介助を考えることによって転倒・転落リスクを評価した上で、患者が日常生活を送るための実現形態を管理することが事故防止の基幹であるとするモデルを提案している。退院調整については、患者が退院時に有している医療ニーズ、生活ニーズを、シーズとしての自宅、医療機関等の退院後の移動先が満たすものとモデル化し、必要な情報を収集しながら適切な判断を行っていくプロセスを表現する「退院調整プロセスモデル」を設計している。

第6章では、本研究を通じて得られた成果をまとめ、今後の課題と発展について述べている。

以上要するに、本論文は、合理的・体系的な方法論が存在しないと言ってよい介護サービス提供プロセスにおいて、その中心となる「ケア決定プロセス」について、ケア決定手順と、各手順で必要となる知識データベースを精緻に設計し構築するという完成度の高い研究をまとめたものであり、この研究成果は、高齢化社会に必要な社会技術ニーズに応えるものとして高く評価でき、医療社会システム工学および化学システム工学への貢献が大きい。またこの方法論は、本論文が主張するように、ニーズをシーズで合理的に満たす思考プロセスを構築する方法論的基礎を与えるものでもあり、工学的に価値の高いものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。